

# 日本学研究は誰のものか

## —フランスにおける日本語教育と日本学—

大島 弘子

（パリ・ディドロ（パリ第七）大学）

### 1 はじめに —日本学と日本研究—

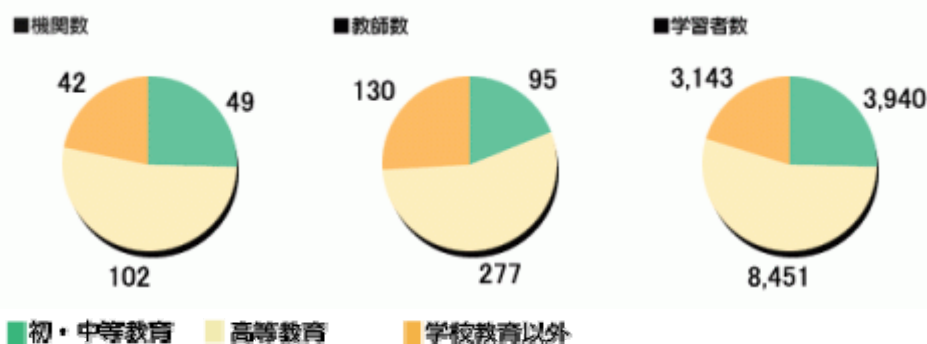
「日本学研究は誰のものか」というテーマで使われている「日本学研究」という表現は、フランスではあまり用いられることがない。むしろ、*Japonologie* の訳としては「日本学」、*Etudes japonaises* の訳としては「日本研究」が使われている。この二つの用語については、ほとんど同じ意味で使われているという人もいるが、微妙な差異を感じる人もいる。パリ・ディドロ大学の同僚を始め、日本関係の研究者の意見を聞く中で次のような差異が浮き上がった。

- (1) 言葉の新旧の違い
- (2) 学問レベルの違い
- (3) 含まれる研究分野の違い
- (4) 含まれる研究分野の広狭
- (5) 研究分野が閉ざされているか、否か

結論としては、「日本研究」という用語の方が、英語訳からできた新しい語彙で、多くの研究分野を含み、しかも横への繋がりを含んだ好ましい用語と感じられていることが分かった。

### 2 フランスにおける日本語教育の現状

フランスは、韓国、オーストリア、アメリカ、英国など、日本語教育が初・中等教育に浸透している国とは違い、又、スペイン、スイス、ベルギー、ドイツなど、正規の学校教育以外の日本語教育が非常に発達している国とも違い、高等教育での日本語教育の比重が圧倒的に高い国である。以下に、国際交流基金による2006年度の「海外日本語教育機関調査結果報告」のフランスの部分のグラフを載せる。



つまり、この状況における日本語教育の目的は、単に「日本語を教える」ことにあるのではなく、「研究者を育てる」こと、または、「学生が将来自分の分野の研究ができるレベルに達するための準備として行う」もの、ということにならざるを得ない。「日本研究」が目的で、主であり、「日本語教育」は手段に過ぎず、目的に従属するものであって、目的とは一線を画するものである。フランスで「日本語教育」が「日本研究」として発達することが難しいのは、根本にこの認識があるからだと筆者は考える。

## 2 フランスにおける日本語研究の現状

日本研究者の中でも、日本語研究者のみ *linguistes* と呼ばれ、その他の分野の研究者は全員 *Civilisationistes* として一括されること、また、前者は、研究者としての専門分野を持たない「単なる語学教師（日本語の授業をしている人）」という意味でも用いられるということから、「日本語の研究者」なのか「日本語の授業をする人」なのか区別が曖昧なこともあるということ等から想像できるように、「日本語研究」特に「現代日本語研究」の専門分野としての認識のされかたにはまだ問題は残るが、少なくとも最近では「日本研究学会」と名がつけば、日本語研究部会も加わっていることが普通になり、「日本語研究」は「日本研究」の一つの分野として認められるようになったと言ってもよいと思う。

例を挙げると、ヨーロッパ日本研究学会（EAJS）は三年に一度国を変えて集まりをもうけているが、2011年8月22-26日にエストニアの Tallinn University で行われる13回国際大会では、分科会が10予定されている中の第二分科会は *Language and Linguistics* と名付けられている。この分科会は、名称どおり、日本語研究にも日本語教育研究にもどちらにも開かれている数少ない例である。ヨーロッパ日本研究学会の場合は、日本から又ヨーロッパの色々な国からの参加希望が多いため、日本語教育分野からの発表も数多くかなり充実している。

一方、フランスに目を向けると、状況はそこまで到達していない。フランス日本研究学会（SFEJ）の場合は、2年に一度の集まりがあり、2008年12月のリール大会の例をみると、7つもうけられた分科会の中には *Langue et communication* と名付けられたものがあり、原則的には日本語研究以外の日本語教育研究が除外されているわけではないが、実際には、総てのセッションにおいて、一つのテーマでいくつもの研究発表があるパネル式の発表が優先されるため、研究者数の少ない日本語研究でも既にパネルを行う人数を確保するのは簡単ではなく、応募する人自体がほとんどいない日本語教育関連の個別発表が採用されることはまれである。

### 3 フランス日本語教師会の活躍と問題点

上述したように、フランスでは、日本語教育と日本文学の間が繋がっていないのであるが、その間隙を埋めようという活動が全然行われて来なかったわけではない。1997年の設立以来フランス日本語教師会は、国際交流基金の援助を受け、毎年日本から日本語研究の第一線で活躍する講師を数人呼んでシンポジウムを開催、向上心に燃える日本語教師の自己研鑽の場を作り、教師間ネットワーク確立などに力を注いできており、その活躍は賞賛に値するものである。

だが、問題点もいくつか挙げられる。まず、2009年1月1日付けの日本語教師会の名簿を見ると、個人会員数152名にも及ぶ大きな組織になっているにも関わらず、その中の仏人会員は10名のみ、152名の中でフランスの日本文学の研究者と呼べるものも10名、仏人日本語研究者はその10名の中の一人に過ぎない、ということが分かる。つまり、日本語教師会は大きな組織となり、頑張っている活動をしているが、日本人の集まりに過ぎず、仏人メンバーは数少ないし、又、メンバーにはほとんど研究者がおらず、特に仏人日本語研究者は一人しか加わっていないわけである。「日本語教育」と「日本文学」の間の溝を埋めるためには、日本語教師会の活動がもっと仏人教師、日本人日本語研究者、仏人日本語研究者のカテゴリーに広く認められ、メンバーの内訳が変わってくるような方向へ向かう舵取りが望まれる。

もう一つ言葉の問題がある。日本語教師会のシンポジウムの発表は原則的に日本語であるが、フランス日本文学学会の発表は原則的に仏語である。つまり「日本語教育」に根ざした研究が、仏人日本語研究者の間に浸透して認められるためには、仏語における発表ができる（を望みます）人材をもっと確保・育成していかなければならない。後身の育成の問題もあるわけである。

### 4 日本語の授業と専門性

では、仏人日本語研究者は日本語教育と全く関係がない状態にいるのかということ、実際の教育現場ではそうではない。大学の日本語研究者は、日本人の場合はほとんど、フランス人の場合でも多くが、自分の専門以外に日本語科目（文法、テキスト講読、仏文和訳など）を教えている。ただ、日本語教育は自分の専門ではないと思っているから、日本語教育全体の進歩とか改善とかにはあまり興味を示さない。では、専門ではない人が日本語教育を行っているから、専門性の問題があって、日本語教育の質が良くないのではないかとすると、決してそうではなく、熱心な教師が多いし、レベルの高いいい授業をする人が多い。一般にフランスの大学教員は、准教授は博士論文を終えなければ公募に応募さえできないし、教授になるにはその上 *habilitation* という昔の国家博士号に当たる資格が必要であるので、かなり競争率の高いところをパスしてきたレベルの高い人たちばかりである。むしろこのレベルの高さと、専門外の人が良い日本語の授業をするということが、フランスにおいて日本語教育の専門性が長い間認識されて来なかった理由であると筆者は考えている。日本語教育の専門性が十分認識されてこなかったから、日本語教育研究や日本語教育学のようなものが発達しなかったのである。

### 5 「日本語教育」と「日本文学」の間を繋ぐ「日本語研究」

日本語教師会の活動で、日本語教師間の繋がりは出来、又、日本語教師のグループが頑張っていることを外に知らしめることはできたが、上述したように、フランス国内の日本研究者特に仏人日本研究者との繋がりを作ることが次の課題であるとするれば、現在既に「日本研究」の一分野として認められてきている「日本語研究」で「日本語教育」と「日本研究」の橋渡しを行うのが最良の策であると思われる。それには、まず、「日本語教育」と「日本語研究」の溝から埋めなければならない。日本語研究者の中にも、自分の専門は「言語学」で、「日本語教育」にも「日本語教師会活動」にも興味がないという人も何人もいるが、数少ない日本語研究者がバラバラではどうにもならない。数年前から、既に小さいながら大学の枠を超えた「パリ日本語学サークル」のような勉強会はあるが、日本語研究者間の連携にとどまっており、共同研究テーマを「漢語研究」としてパリ国際大会を開いたりする試みはあったが、「日本語教育」と近づくための共同活動はまだない。このような共同研究のテーマとして、普段の日本語の授業から出てきた問題、問題意識から出発したものを掲げることができるようになれば、「日本語教育」を研究に近づけることができるのではないか。そのためには前述した日本語教師会との連携を考えるとという方法もあるだろう。そしてその成果を授業にうまく還元させ、良い授業を行い、年に二回ある学生による教師評価でよい評価をされることによって、**Civilisationistes** による日本語の授業とはまた違う「日本語研究者による日本語の授業」の専門性の高さが認められれば、それは又「日本語教育」を「研究」に一步近づけることになると思われる。

「日本語研究」の「日本研究」における地位を確固としたものにするには、フランスの「日本語研究」のレベルをあげることと、研究活動を活発にすることに尽きると思われるが、それには個人レベルでは限界がある。

## 6 終わりに—これからのフランスの日本語研究—

はじめに述べたように、「日本研究」という語には、「日本文学」という語にはない「分野を越えた横との繋がりの可能性」が感じられるということを述べた。「日本語教育」と「日本研究」の間隙を埋めるために「日本語研究」を発展させることを考えると、やはり横への広がり、色々な連携の可能性が考えられ、又、その方向に動くことが実際に必要であると思われる。今までは、フランス国内での日本語研究者の集まりのことしか述べて来なかったが、フランス国内でも、他の外国語研究者との共同研究などの可能性も考えられる。ヨーロッパでは **CEFR**（ヨーロッパ言語共通参照枠）が作られてから、EU 内でも多言語共同プロジェクトなどが行われており、**CEFR** 関連研究は語学教育と密接に結びついた言語研究なので、日本語研究も英語研究、または外国語としてのフランス語研究などと連携して、そのようなプロジェクトに関わることも可能であると思われる。

又、もう一つの方向は、EU 内の国の日本語研究者と連携して、共同プロジェクト・共同研究などを始めることである。EU 内は学生も教員も「モビリティー」（他の国への移動）がどんどん奨励される方向にあるため、この方向での連携は追い風に乗るように思われる。

勿論、「日本語研究」の本場である日本発の「日本語研究多国間プロジェクト」などがどんどんできれば、それへの参加も考えられる。